

事務局、では、これから座談会を開かせて頂きます。私、事務局としてこれまで、運営委員会・実行委員会とともに、三〇周年の準備を進めて参りましたが、やはり諸先生方による座談会をもって以前のことは是非お聞きしたいという要望が出て、企画した次第ですが、今日は諸先生、大変お忙しいところを、時間割いて頂きまして本当に有難う御座います。今日は、会発当初からのことを思い出しながら、ゆっくりと御話いただきたいと思えます。そして、最後に、今後の展望みたいなものにもおふれただいて、私たちそれを『研究通信』で会員にお知らせし、実りある三〇周年の大会を迎えたいと考えておりますので、宜しくお願い致します。では、これからは司会の三人の先生に……。

高山 それでは司会の口火を切ること……。お手紙さしあげましたように、座談会では、村研発足時の経緯と状況、それから村研と各先生とのかかわり、農村の現状をどうご覧になっているのか、村研三十年の評価と今後の課題ということで、これは大ざっぱな柱でございますが、私たちといたしましては、相談いたしました時に、村研発足時の経緯は経緯でございますが、そのところ村研発足時の経緯をしなければならぬというふうにお考えになった当時の問題意識、一番中心的に先生方がお集まりになつて、何を考へて村落社会研究というものをしなければいけないというふうにお考へになったのか、その辺からまずお話を始めてい

座談会

「村落社会研究会

三〇周年に当たって」

出席者

内山

政照

司会

安孫子 麟

小池

基之

高山 隆三

内藤

莞爾

安原 茂

中村

吉治

事務局

福武

直

島崎・吉沢・櫻村

三本松

出席

ただきたいと考えている次第でございます。

福武 いま司会のお話で、どういう意図でと言われると困るんですが、経緯を多少申しますと、こういうことになるかと思うんです。

戦後、人文科学委員会というのがあって、山田盛太郎さんが親玉で、文部省のお金で封建遺制というのをやったりしたわけですね。その段階で文部省から金が出なくなると、日本文科学会というのできちちゃったわけですよ。古い方は思い起こされるでしょうけれども、尾高朝雄さんが親玉になって、あの人はユネスコとの関係があったものだから、ソーシャル・テンション（『社会的緊張の研究』）をやるうということになって、それぞれの分野で同じような問題を取り上げてやるうじゃないかということ、農村の方もやれという声がかかったわけです。それで有賀さんを親玉にしまして、こちらにいらっしゃる小池さん、内山君なんかもそのメンバーなんですが、最初、桜井さんが住んでいる茨城県の恋瀬というところで調査をやりまして、これが一九五一年度、それから一九五二年度、実際に調査やったのは四月ですけども西塩田村を扱う。さらに一九五三年度、これも実際に調査したのは、ギリギリの一九五四年度になったんですが、鶴岡近郊の大泉の調査をやる。

そういう経過が一方にございまして、もう一つは余り正確でないですけども、SSM調査というのが、日本社会学会で行われたわけですが、本会の方は、ロックフェラーから金をもらって

やるということだったわけです。それが終わった後、農村のSSMをやるうということになりました、実際に行われたのは五四年、五五年なんです。

そういう相談があったというのが一つの背景になるんじゃないかと思うんですが、そういうつながりで調査をやっているうちに、村落研究の学会つくろうじゃないかという話になって五二年、学会（社会学会）、その時私、庶務理事ということになったわけですが、確かその学会は教育大学で行われたと思うんです。その教育大学での学会の後、十一月頃に、その時村研と、名前まで決まっていたわけじゃないんですけども、そういう学会めいたものをつくろうということになりました、それで準備が進んだわけです。

農村のSSMというのが実際に行われたのは、先ほど申しましたように五四年、五五年なんですけれども、その前に文部省の科学研究費を、ということで、実際にこの相談を始めた頃に構想したのは、一つグループとして福岡であつたんです。関西の方で和歌山をやって、関東の方は甲府の郊外の、これは大変おもしろかった村なんですけれども、結局何もまとまりませんでした。そういうつながりで声がかけられた、それからその当時の長老の人の名前を並べてもらったということではないでしょうか。それでできて、あと中村さんに入ってくださいということで引張り込んだと思うんですが、発起人というのを見ますと、社会学なんです

小池 テンション調査と村研とは直接につながりはないでしょうね。

福武 直接につながりはない。つながりはないんですけども、社会学の方でやろうじゃないかというので広げたのは、まさにテンション調査のつながりだろうというふうに私は思っているんです。小池 なぜ村落社会というものをしようということになったんですか。実は、僕はいまだにそれにひっかかるんですがね。なぜ村落社会をその時にやらなければいけなかったのか。

福武 当時村落社会がこういう課題を抱えて、これを解明するためにはやろうというのではなくて、仲間をつくり上げてやろうじゃないかという……。

小池 有賀さんは何かあったんじゃないでしょうかね。

福武 最初の頃に取り上げたの思い起こしますと、特にこういうことを、という共通の目的意識があったとは思えないんだけど、とにかく村を勉強している連中で集まって学会をつくらう。つくるに当たっては、最初、いままでどういふことをやったかというのを顧みてみよう。そして、その当時は農地改革後ですから、農地改革というものによってどういふことになってるかというのを見ようというような、そういうくらの共通意識があったと思うんですけども。

安孫子 封建遺制といますと、何か否定されるべきものというのか、戦後の民主主義日本にとっては何となく悪いもので、そういうものをなくさなければいけないという、農地改革なんかの時もそういう考えがあるわけですね。そういうつながりで村研ができたという

いうことはないわけですね。つまり古いものだからこれは否定しなきゃいけないという……。

福武 いや、別にそういう農村に対する見方を何か共通にして、研究会をつくったということじゃないように思いますけどね。

中村 ないだろうな。

内山 今朝、これはいけないと思って、年報第一巻の有賀先生のあとがきがあるでしょう、あれをあわてて読んできたんですよ。そうしたらやっぱりその中に有賀先生は、いま安孫子さんがおっしゃったように、農村の封建遺制云々というんじゃないで、農村の民主化ということを出しておられたんですよ。農村の民主化というのは、当時の日本の第一級の問題だったでしょう。食糧増産ほかあるけれども、その農村の民主化ということに向かって、各分野で農村の民主化について始めて——始めてと書いてあったかそれはあやしいですが、農村社会の問題が、いわば国の第一級の問題として提起された、そういうことで農村社会の民主化ということ、経済学も法律も民族学も、全部結集したんだというご趣旨のことを、有賀先生が書いておられる。そういう当時の状況——二十八年というともうそろそろ、やや民主化のローソクの最後の輝きの頃ですからね、おくれげせながらだけでもそんなことで……。

だから、いま福武さんおっしゃったように、いろんなテンション調査その他もあるけれど、それからそういう学会だけじゃなくて、もう少し広い、たとえば農林省も福武さんご存じのとおり、

農政滲透調査が……、今朝それを見てきたんだ。やはり二十八年すよね。農林省自身も行政の方も関心を持ち、農村の方も、ご承知のように復員の兵隊、あるいは街から帰ってきた、工場から帰ってきた若い人たちを中心に民主化運動が起こっている。農林省も一生懸命だ、国の第一級のポリシーでもある、学会でももちろん関心を持つというような、いまの四面楚歌と違って、あの時は四面花なんだな。そういう中であらゆる社会学——イニシアチブとったのは社会学なんでしょうけれども、第一級の課題なんだから、各分野の方々がおのずから集まるような土台があったと、こう僕は今朝読んできたんですけれどもね。有賀先生が第一巻の年報の中に書いていらっしやる。

高山 ここにある『村落研究の成果と課題』の後記のところ、いま内山先生がおっしゃったように、やはり「占領軍によって敢行された法律や制度の上の重大な変化とともに、生活の変化も目立ってきたが、この変革に盛られた民主主義への要請が、外的にも内的にも熾烈になってきたことは、敗戦の深刻な経験を通して、日本及び日本人に対する痛烈な認識を要求してきたからにほかならない。村落研究もこういう機運の一環となった」——「こういう機運の一環となった」というんで、どうも有賀先生一流の表現なんです、やはり民主主義の問題でございませうかね。

福武 そんなに強烈というものはなかったように思うんですが、それよりもむしろこっちの方へ『研究通信』一号所収の「村落社会研究会の発足にあたり」は非常に素直で、それはちよっとかっ

こつけて……（笑）。「生活や経歴や考え方の異なる人々が相接することに……」という。

中村 その点は、僕はそのとおりだと思う。誘いにきたのがもっけの幸いに、仲間に入ったみたいなことなんで、私自身はこの第一回の時の説明でもやったのが、後に煙山でまとめたの中間報告です。つまりそういうことを私は仙台でやっていたわけですよ。ですから、東京で人文科学がどうの、民主化がどうの、封建遺制がどうのなんていうことと一切関係なしに、経済史として僕は農村やってきましたから。ところが農村にならないんで、農政にしかならない。それで、有賀喜左衛門というのは、僕の子供の時から常に接触してましたから、よくその話をしてくれておったんで、それで彼が村をやるために「おまえは農村のフィールドへ出てやらないんじゃないか」と文句言われたわけなんで。そう言われたってやたらにできるものじゃないことを言っているうちに、戦争から帰ってきた連中が、優秀なやつがいっぱい帰ってきて、学問をしたいという連中や、熱意に燃えている連中が参って、それならということ、この煙山の調査を始めたわけなんです。

その時に、一方で九学会、ああいう総合研究というようなものが、やはり言葉みたいにあつたね。ところが、あれは総合にはならないんで、個人がやっただけで、ただデパートみたいにくさんあるというだけで、本当に総合じゃないじゃないか。われわれのところは学者の集まりじゃなくて、まだ大学院、あるいは学生なんだけれども、本当の総合をやりたいという気持ちは、非常

に強かったわけなんです。そこへ社会学の方で、いまおっしゃったような、どういう起源がもとになってるか知りませんけれども、「おまえの方でも一緒に討論の中に入ってやらないか」ということを有賀氏に言われて、「それはよろしい、一緒にやりましょう。本当の総合研究をやりましょう」というようなことで、すぐ応じたわけです。いささか軽率だったかもしれないけれども、向こうでそういう気を持ってやっていた時だったものだから、それと、実際に実態調査やって成果がどんどん上がってくるし、おもしろいし、少し気負っていた意見もあって、引きずり込まれたんなら、それを今度おれの方で乗っ取ってやろうというくらい意気込みがあったかもしれないんですけども、それで入っていったんで、第一の目標は、やはりいろんな人がともども相互に討論し合っていくという、そこを強く彼は言ってきたように思いますし、私の意図もそこに一番あったように思いますね。

高山　そういう点では、小池先生も有賀先生から呼びかけられたという点でございましたが……

小池　僕はこれ見ますと、第一回、二回は出ていないんです。なぜ出てないかといいますが、ちょうどこの時は日本にいなかったわけですよ。そして第三回の毎日新聞の大阪本社でやった時に報告をしろということで、それで過剰人口の問題をやったわけですね。ですから、この辺のところですね。こういう村落社会研究会というものがあるんで、過剰人口の問題を報告しないかということが、誘われた第一のきっかけですね。

中村　社会というのは、ちょっとわれわれに魅力的だったんだな。

いろいろのことを知らないものだから、知ってしまえば……(笑)。

それで、個人的に僕は有賀氏とよくしゃべり合っていたんですけどね。社会構造というようなことを考えなさいだめだということ、僕は農政史ということ、百姓一揆とか土一揆みたいなことばかりをやってたものだから、農民が出てこない。それはやはり村落の中で出てくるんだからということ——。ところが彼は、それで社会形態学ということ、言い出してたことがありましたね。社会の形態を、とにかく年代別に並べてみるみたいなことを言い出して、それは並べただけじゃどうしようもないから、それをわしが経済史でもって血を流してやる。中へ入れてやる。これだけじゃしようがない。そんなことを冗談めいたような言い方で言い合ったことがあるんです。そういうこともあって、ここで社会学の諸君が農村というものにしばった、同好の人たちが集まって、村落社会の旗上げをするからというのに、きわめて自然に合流する気になったということ、もう一つ、第一回が仙台だったということですね。これは偶然ですけども、仙台であったものだから、別にどういう主張をする、だれが主張するということなしに、昔の仲間全部が同時に参加できて、そこでご記憶の方もあると思いますが、勝手気ままな放言を盛んにやらしたような次第ですね。これは一つの偶然ですけども、しかしこれも重要な要素だったと思います。

安藤子　確かに第一回大会の雰囲気というのは、いまおっしゃった

協力というか、協同というか、いろんな違ったことをやってこられた方々が、とにかく同じ土俵に入ってやるんだという、そういう熱気みたいなものは非常にありましたね。私も卒業したばかりの頃で、右も左もわからなかったんですけど、あの雰囲気だけは非常に印象に残ってるんです。一回目は確か内山先生ご報告なされたんじゃないですか。

内山 いや、私じゃございませんで、森住（伍郎）という、亡くなりましたが……。おもしろかったですね。学会であんなおもしろい学会、なかったですね。後にも先にも……。

中村 そんな感じがしますね。あの頃のいろんな学会で、あんな雰囲気のもの、ちょっとなかったですよ。

内山 何で中村先生は、あんなにおもしろくなつたんですか、仙台ということがあつたし、有賀先生や中村先生、皆さん方のお人柄はもちろんあつたけれど、いま仮に有賀先生が五十歳、中村先生が四十八歳ということで、さて、というふうになると、あんなじゃないんじゃないでしょうか。お人柄って、何か――。

中村 しかしあの時期、総合しなきゃならないというのは、さっきもちょっと申しましたけれども、九学会連合とか、一種の流行みたいなのがあつたんじゃないですか。

福武 学際的な共同調査、そういう雰囲気……。会則にも共同調査というのが出てますからね。意図的には、それはかなりあつたでしょうね。

中村 みんなの気持ちの底にあつたんじゃないでしょうか。それ

で、村落という自分の身近な問題でそれをやるかという期待というか、そういうことも熱気を帯びさせたんじゃないんでしょうかな。

内山 いま中村先生のおっしゃったことで気がついたんですけども、農地改革とか、民主化とか、そういう社会的な情勢、これはもちろん状況として、あつたとしても、そのもとなつたのは、昔から村落やつてこられたというのは個人的な衝動だったという――言葉は悪いですけど、お話があつたんです。そういうふうにおっしゃられてみると、僕自身も福武先生その他に引きずり込まれた――実は僕の方がお願いしたみたいな形で入れていただいたような始末なんです。もともとから考えてみてやはり、私は農業経済出身で、アマチュアのソシオロジストですから、とにかく農業経済にいながら、当時の農業経済はもう東畑先生その他が中心になられて純粋経済学の方に――マルキシズムならまだよかつたんでしょうけれども。純粋経済学の方に偏っていて、経済学の講義が微分・積分というふうになっちゃっていたからおもしろくありませんで、経済学はデイズマール・サイエンスだということで、もっぱら農学部じゃなくて文学部の講義ばかり聞いていて、綿貫さんの「社会形象としての維新の人物」なんていうのは、社会学科の学生よりも熱心に聞きましたし、尾高さんの第一回の職業社会学の講義も聞いたとか、仏教が好きだったから仏教、哲学――文学部の学生みたいなものだったんです。そういうことで、社会学という、そういう夢は中村先生おっしゃったとおり、戦前から

社会学にアマチュアとしてあこがれを持っていたというふうだったと思います。

そういう個人的な衝動があつて、先ほどどなたかおっしゃったけれども、戦後ああいふ状況の中で、いわば後から理屈をくつつけたということになるでしょう。そういう状況の中で、僕の個人的な関心が皆さんのご縁で一緒になっていく。説明すればそういうふうになったんじゃないかと思ひます。

いまの問題に飛んで悪いけれど、一体いまの村研、あるいはいまの大学の全体もそうですが、個人的な意味でおれは好きだとか、やってるんだという、最も個人的な衝動で村研に来るということが、やや乏しくなったんじゃないか。仮に、いま農政の役に立つとか、最も露骨に言えば学位論文の一つの点数にするとか、前はもちろんそういうのはあつたにしても、個人的な関心の方が強くて、それが一斉に解放されたあの場面の中でワーンと噴き出していったという——これも後の説明になりますが、恐らくそれが第一回の仙台の大会の熱気のもとにあつたエネルギーだったかもしれないという気を、いま中村先生のお話を伺いながら思ひ出してゐるんです。

内藤 発足した当時、私はもうすでに九州に去つておりましたので、一応発起人の名前になつてゐるかもしれませんが、私の参加の度合いというものは、ほかの先生方とちよつと違つてゐると思ふわけなんです。ですから、その当時の情勢について私の受けとめ方というのは、地方から眺めたという視覚がかなり濃厚だか

ら、全体的に当てはまるかどうかわかりませんが、丁度、現在は「地方の時代」だなどという掛け声があるんだが、あれは空念仏で、発足した当時はまさに「地方の時代」であり、もつと端的に言うならば「農業の時代」であつたと思ふんです。食えなかつたんですからね。

私にとっては当時の農地改革というのが、非常に大きな農村の革命みたいに映つたわけなんです。ところが——これはちよつと差しさわりのあるかもしれませんが、その当時の農地改革の受けとめ方というものには、経済的な視点というものが非常に強く出てきて、あるいは分析の比較というものも経済学的であつたというように感じられたわけですから、そこで、私は社会学ですから、そういう経済的メカニズムについて、そのとおりであるかどうかという疑念が、この会に参加させたバックであつたと思ふわけです。先生方がおっしゃつたとおり、各人それぞれ問題意識というものがあつて、私自身は戦前から農村には興味なくて、漁村には興味あつたんです。だから、この会が「農村社会研究会」だつたら入らなかつたんですがね。有賀先生なんか序文かあとがきで整理して書いてあるけれども、多分多くの人は、それぞれの問題意識、あるいは関心に従つてこの会に参加したというところが性格じゃないかと思ふわけなんです。そういうわけだから、インフォーマリティーというものがこの会の特徴であつて、早い話が会則はないし、会長もおらんし、ということば、そもそもそれぞれの人の関心は、かなりバラバラなものであつて、いつかまとまるだ

ろぐぐらいの安易な予想みたいなものじゃなかったかと思うんですけれども、何分私は九州から眺めたという、斜に構えて見えますから、この見方が当たっているかどうかわかりませんが、とにかく当時の状況というものは、そういうわけでえらく筋目立ったところのものじゃなくて、筋目立つなれば強力なリーダーみたいなものがあって、その人が中心になってある方向を打ち出し、それに関して共鳴するという形ならば、一つのオーガニゼーションになるんだけれども、オーガニゼーションになっていないところがある。それがたまたま仙台という場所を得て、いよいよインフォーマリティーな面が強く打ち出されてきた。(笑)ですからあの当時にいいますと、例えば、武田良三さんとか、あるいは新明先生は会員かどうか知りませんが、仙台の時は出ておいていらっしゃるんですよ。臼井二尚という先生、この方も後で有力なメンバーになっていく。その辺も僕は何となく関心の度合い、あるいはバラエティーというか、かなりバラバラなものがあって、あの当時は文字でおり農村の時代か、もっといえれば農業の時代ですものね。

福武 臼井さんは初めから入っていないんです。池田義祐は入ります。

中村 いまのことに関連して言いますと、われわれは社会学というものは非常に漠然としか知らなかったわけですよ。いまでも名前が出ましたけれども、新明さんだって社会学者でしょう。しかし農村なんていうものは問題意識にないわけだ。ああいう社会学：

…、と言っては悪いけれども、確かにあるわけでしょう。そういう中で、村落社会ということになると、逆にこっちからいうと、えらくはつきりつかみやすいものに近づいたという感じはしましたね。

小池 そういう点と考え合わせてかもしれませんが、私も第一回の時は知らないんですけれども、第一回から研究会は泊まり込みですか。

安孫子 第五回からです。鳴子に泊まったから、必然的に泊まり込みになったわけですよ。

小池 この会の特徴も泊まり込みということにあるわけでしょう。

これが一つの独特の雰囲気を出して、研究会としてはそういう形でやるところは恐らくないでしょうね。これは、そういう意味ではやはり村落社会だと思えますよ。(笑)

中村 これは福武さんに伺いたいですけれども、農村としなくて村落としたでしょう。何かこれ、意識があったのかしら。

小池 問題はそこなんですけれども、なぜ村落なのか。

福武 初めから村落なんです。ただ、村落社会学にするか、村落研究会にするか、村落社会研究会にするか、どれがいいだろうということを議論してらるんですね。だけど、初めから農村にするか、村落にするかという、そういう意識なかったですよ。それは私もよくわからないんですけど、やはり漁村の研究者というのを念頭に置いたんじゃないかという気がするんですけどね。村の研究者を広くというか、初めからいろいろの専門分野の、という意識

があつたわけです。

中村 そうかもしれないね。そうすれば、農業がなくなっても村落研究会はあるという……。

福武 いや、そこまでは……（笑）

小池 日本の社会をつかんでいく場合に、村というものが一つの基底にあつて、村がつかなきゃいかん、村の集合体だという意識があつたんじゃないだろうか。

中村 しかしそういう概念規定みたいなことは余りやらなかつたね。

福武 うん、やらないというか、農村という考え方がなかつた。村落は確定している、その後、どうするかというのか、どれにしましよつかという議論ね。村でもいいんだけど、「村研究会」というのは……少し学会めいて村落と……

安原 たとえば福武先生の初めにされた『中国農村』、農村という表題ですけれど、村研に参加される時に、農村と村落とどちらが上でどちらがどうかという議論はどうですか。

福武 私は、一方においていろいろの専門分野の人が顔を合わせるがいいんだというそういう発想と、もう一つは広く村という意味で、農業村落には限定しないという、そういう感じ方で村落だという感じがするんです。有賀さんも多分そうだろうと思うんです。有賀さんが広くいろいろの人とやつた方がいいな、と思つたのはテンション調査だろうと思うんです。

小池 それはそうでしょう。あの時に、いろいろの分野からの一つの村の調査というものが初めてできたでしょう。それまでは、社

会学なら社会学の連中だけが調査している、経済学なら経済学の連中だけが調査している。あの時に初めて有賀さんが、社会学も経済学も歴史学も集まってやろうじゃないか。だから永原慶二君が入つてたですね。

安原 やはりいろいろの立場、いろいろの見方の違った方々が集まつて、それぞれの問題意識として持ちながら勉強していこうじゃないかという感じで、お互いに刺激を受けるといふ、こういう意味でのいい経験というのは、テンション調査ですね。

小池 そうだと思えますね。そういう意味ではつながりがある。また、僕がどうだと言われたのも、テンションのつながりでしょう。もっともその前から有賀先生は、慶応義塾の経済史学会へお越しいただいたことがありましたけれども。

□

高山 そして、このこともお伺いしたいと思つたんですが、福武先生が中心になって、『村落研究の成果と課題』という形で、最初の第一報をお出しになって編集なさつていらつしやるわけです。その時に、経済関係のところは小池先生がお書きになる予定になつてた。それがフランスへおいでになつたんで、大内先生にかわつておりますから――。

小池 それは、僕は記憶ないです。そういう交渉を受けたことは記憶ないです。

高山 それは別といたしまして、そういう中でこの『村落研究の成果と課題』という一番最初のを見ますと、やはり戦前からの研究

で、社会学、経済学、民族学、それから農山村という表現をとって、そして村落構造、家族と分解して、いままでの研究史を一応総括して、その次の今後の研究に資するという形で、最初はこれでございますね。まずこれから刊行物として出発したということ、これと実際の研究会のあり方は違っているわけでございますね。小池 それは時潮社版はそうなんです。とにかく研究会で宿題を出して、それで報告しますね。その成果がそのまま年報に反映するという形ではなかったわけです。年報の方は別に、その時々テーマを決めて原稿を約束し、もちろん報告原稿の中には入りませぬけれども、直接にはつながりがない、こういう形だと思えます。高山 過剰人口の問題については、年報と報告が二年続いておりますけれども、一緒になっておりませんか。

小池 時潮社の方から、今度は過剰人口にして出せということになるんです。ですから、もちろん報告されたものが中心にはなりませんけれども、後の稿書房の時みたい自由投稿原稿その他入れであるということはないですね。

高山 これを見ておきますと、その後のことですが、もう一つ『村落共同体の構造分析』で、いまでいう年報ですが、こういうふうにとまとめる。これをまとめようというお考えをお持ちになった経緯というのは、どういうことだったんでございませうか。これは、いま読んでも大変レベルの高い、非常におもしろい本でございますね。

福武 レベルが高くておもしろいかどうかそれは別として、これは

ベストセラーですぐなくなっただんです。すぐなくなって、復刻するまでべらぼうに値段が高かったんです。

中村 これで村研らしいものが出たな、という感じがしたことは確かですね。

高山 ええ。僕は時潮社版ではこれが大変おもしろかったんじゃないかと思うんですが、これが出るまでの間、こういう研究会は全然やっていないわけでございますね。そうすると、こういうものと研究との関連がもう一つ、どうなっているながらここにまとめいったんだらうか。一つの村研の中でみんなやり合っていないながら、この辺にひとつ理論的にも整理しようということが出てきていたんじゃないのかという感じがするわけなんです。その辺のところが一。

中村 みんなが潜在的には腹の中に持っていた問題を、一応さらけ出してみる、そんなことじゃないでしょうか。

福武 戦後の封建遺制などということ言っていた時の流れからいって地主制が云々ということ、残ってる、残ってないということ、しかし残ってるというのはいかに無理になってきて、それにもかかわらず農村は余り変わらないじゃないか、それで共同体という、そういう雰囲気全般にもあったわけですよ。それで、村研がこんなことをやって、例外的にすぐ売れてなくなったのは、そういう背景があったからじゃないでしょうか。

高山 ちえうど大塚さんの『共同体の基礎理論』が出た頃でもあったわけですが、……

島崎 この間の編集は主にどなたが担当されてたんですか。星笠さんなんかにはどなたが、

安孫子 後記は福武先生お書きになっていらっしやるんですね。

中村 多分いろいろな問題は問題として、議論はあちこち行われていたけれども、根本の村とは何だというものはなかった。それにこれ、こたえたんじゃありませんか。少なくともこたえるように見えた。村研は村について勉強しているんだ、そういうことじゃなかったかと思えますがね。村落研究とかそういう種類のものはないですよ。

高山 ここで中村先生が、煙山の調査というものを踏まえながら、日本の村という問題についてお書きになっていらっしやる。その後で、『日本の村落共同体』を先生はおまとめになったわけで、あの考え方の骨子はこの中に入っている……

中村 この中に当然入っているものでして、それもまたいろいろ書いたり、補充したりはしておりますけれども、出発点、あるいは出発点をもっと前かもしれないませんが、それはまだ懐疑の状態で公にはしておりませんけれども、多少生まれてきているのは、社会史という本に私書いておりますから、それに部分的には出しておりますけれども……

安孫子 煙山の本が出たのと同じ年なんですね。あっちが春に出て、これが秋に出るといふ。

高山 そして、なぜ私、お伺いしたかったかというのと、これが出た後で、共同研究で村落共同体の問題を取り上げるようになる

っているという、そういう順番があったと思うんですね。……

安原 煙山というものが『研究通信』に今度出ますよ、ということが出ています。全体としては人口をやっている。

高山 ええ、人口をやっているんですね。

安原 年報は？

高山 『村落共同体の構造分析』が出る、編集されているわけです。

ここが違う……

福武 私が書いてるのは、そんなことを書いてるかな。「本来なら昨年第三回の研究通信の共同課題、農家人口の変動と家族の構造に関する特集が、第三集の内容をなすべきものであった。しかしこのテーマがさらに論議を重ねる意味において、本年の大会に引き継がれることになったため、見られるように構造分析を——出した次第であります。」(笑)

高山 そうなんです。そこで一体どうなっているのか。そして、実はこの本が出た後で、次のシンポジウムで村落共同体を正面から取り上げる。むしろこういう研究が、先に各々の先生方の蓄積があった上で、これをもとにして——だからこれは、ここに村研の村落共同体論にひとつ集約されていったのかな、という感じがあるんですね。最初のいろんな研究が……

中村 私の記憶では、ここへ収斂していくのが本筋じゃないか。一生懸命そうやろうじゃないかというような気はあったと思います。しかしこれは、共同でやったものは非常にまともにくいんで

すよね。やはり個別的の問題の研究が積み重ならないとできないことだし、その辺がうやむやになったような感じがするんですけどね。しかし、皆さんのそれぞれの個別の問題を取り上げてる時にも、腹の底には村落社会というものはあったんじゃないんですか。それがあつたんでないと、村研というものはむだな会合だったということになりますね。

福武 当時の情勢からいって、村研は一言なかるべからずという、そういう気になったのかもしれないですね。

小池 これは僕はよく覚えていないんですが、編集委員会では村落共同体を取り上げようじゃないかという動きが編集会議の中であつて、そしてだれに頼むか——いま思いますと、星埜君には僕が頼んだんだ。

安原 大体この本が出た頃あたりから、一体村とは何だということ、これがらしゃっちゃう話題になってくるんですね。

中村 これから話題になってきたでしょうね。だから、いつでも腹の底には、村とは何であるようになったというんじゃないでしようかね。

高山 この本が出たんで、村研の場でも村というのが非常に大きくオープンな形で討論されてきたような感じもするわけで、そして実際に村落共同体のシンポジウムをやつて、その後でもう一度『村落共同体論の展開』ということで編集した。だけど、こっちの方が売れてるんですね。後の方は余り売れなかったんじゃないですか。(笑)

福武 それは時代の流れが、星埜君が書いたりなんかして、とにかく関心を集めておつた時ですよね。それからちょっと下火になつちやつたものだから、その次は売れなかった。

安原 結局それぞれの方々が問題意識はそれぞれにお持ちになつていて、内山先生なんかずっとその前から調査やつておられるわけですね。中村先生がフィールドやつておられたり、問題意識はそれぞれ違つていて、しかし何かそこに求めるという意欲や熱気が、相当出ていたということがいえるんですね。

福武 先生は前からずっと調査を一緒にやつて、小池先生と内山先生と有賀さんが顔合わせるなどというのはテンションが初めてで、その以前にはそういう話は全然ないわけですか。

福武 いや、内山君とはほかのつながりもあるし、ただ小池さんと先ほど言ったようにテンションで。有賀さんに相談して、それで小池さんも来てくれたと思います。

内山 その時に初めてお目にかかったように思うんですね。テンション調査以前にお目にかかったことありますか。

小池 人文科学会で、僕は封建遺制の時というのは知っている。

福武 封建遺制をやつたのは、人文科学会ではなくて、その前の人文科学委員会……

安原 内山先生は、有賀先生にお会いになつたのは何時頃ですか。

内山 総研の専門委員におなりになつていて、ときどき御出席になつた……。余りお近しい関係にはなかつた。それで、テンション調査ですね、一緒に村へ……。

安藤 一方ではテンション調査だといひ、一方では中村先生、個人的なおつき合い、そういう橋渡しみたいなのは、やはり有賀先生が……

福武 そうですね。だからご説のように、親玉をつくらないという会議なんです。そういうものでずっときてますけれど、一応喜左衛門さんが中心で、喜左衛門さんが中心でなかったら、中村さんを巻き込むということはなかったと思いますね。

安孫子 会則がないということ、会長がないということ——

福武 会則は一応あるんです。

安孫子 そうですか。約束がないんですね。もう一つないのが、第一回で閉会の辞がないということ、あれは先生、何か特別なお考えのもとで……

中村 いや考えじゃないんだ。最後にあそこの主宰というか、場所のあれだから、「おまえ閉会の辞をやれ」と言われたんだ。おれは演説は大きらいだから、「よしにしましょう」と言ったら「じゃあ、よしにすることを言え」と言うから……(笑)

安孫子 来年まで続けましょうという話になったんですか。(笑)

福武 そうなんで、きわめてインフォーマルで、会則だってあることはあるんですけど、いまの閉会の辞なしというのに示されるように、初めから閉会の辞なしにしようということで始まったわけじゃないんで、たまたまそういうことになったものだから、それが伝統になったというだけの話で——

☺

高山 そういたしますと、きょうおいでの各先生と村研とのかかわ

りなんでしょうが、実際、初期の頃ああいう形で村研とかかわり合ったということで、先生方にとっては村研というのはどんなものだったのか、一言ずつお話し願いたいんですが、順序つけずに……

内山 昔はずいぶん飲んで議論して、それからお人柄のいい先生方——僕は先ほど申しましたように、アマチュア・ソロジストですから、本の上でお名前だけ見ていた先生方、有賀先生とか、福武先生もそう、中村先生、小池先生、そういう方々にお目にかかれて、そこでまともなご教示を得たという記憶は余りないんですけど、(笑) コーヒー飲んだり、酒飲んだりということで、全身でその先生に接しられるというのが、僕にとってはものすごく魅力でした。むしろそれだけの魅力でいつもお世話になったというような——。僕は農業経済で、商売の農業経済関係には、それはもちろんあれですけど、ちょっとはずれるとなかなかそういう機会が私どもにはありませんでしたので、そういう意味ではものすごく貴重なものだし、そうやってお人柄がわかったり、ダベったりして、今度、先生のまじめな著書を拜見する時に、迫力が違っているんですね、あそこでああいうかっこうして寝てたあの先生がこんなことを書いてると、妙なものです。(笑) ということが僕にとってはものすごくありがたかったような気がしてまいります。

それから後半からの村研になれば、これはなんか、その時お知り合いになった先生、それから仲間の方々と、飲みに行くみたい

な感じなんです。はなはだ不まじめな話なんですけれど、そっちが八分くらいになっちゃって、あと二分が義理みたいになっちゃって、正直な話、申しわけないです。現在も義理の方も0・00 PPMぐらいになりましたかね、もっぱら失礼させていただくことになっちゃって、大変申しわけない。

お知り合いの方も、出るともう若い方々が多くなっちゃってますから、同窓会という魅力もやや、率直に言って減ってきたものですから……。最初につまらないことを言いました。

内藤 私も内山さんと似たり寄ったりなんです。この『研究通信』の付録みたいな「村研の足どり」というこれを見て、私は何回出たかという、よく覚えてないけれども、十二回しか出ていないんですよ。二十九回だから、見送り三振が六割か七割あるわけだ。それならば、出た時に発表したかという、僕の覚えだと三回しかないんですよ。だから結局打率は一割しかない。というくらいだから、僕は余り熱心な会員ではなかったと思うんだけど……。しかし東北の学会にはみんな行ってるんだ。勉強しに行ってるんじゃない、観光に行ってるという。たとえば、さっきもお話したとおり、東京で、神田なんかでやってる時は、見向きもしないんでね。私だけかも知らんけど、多少でも皆さんの中には、何か普通の学会はスケジュールがちゃんと決まっています、シンポジウムだと課題報告だとかいう儀式性がどうしても重視されるのに対して、村研の場合はボランティアというのかな、あるいは同志的結合というのか、さっき言ったインフォーマリティー

といったようなものが、僕はこの会の特徴だったと思うし、僕もそういうように受けとめて、この会には参加できたと思うんです。中村 私も改まってそう言われると返事のしようもないというふうな関係で、ただ懐かしい会ですね。ということは、現在、ずつとこぶさたしているということも白状していることになるんですけども、しかし、最初に考えた頃は、これは有賀喜左衛門との二人の話で、まあまあになってしまおうからそうなるんだが、井戸端じやなくて囲炉裏会議みたいになろうじゃないかということをやったことがあるわけですね。だから、インフォーマルとさっきから盛んに言われておりますけれども、インフォーマルという点ですと取りとめないんで、懐しいといっても、何が懐しいといわれるとまた困るんですけども、何か懐しい感じがするということと、それからもう一つは、少し開き直っていくと、最初に考えたように、この社会学という学問に対して、経済史あるいは経済学というものをぶつけた時に、そこでどういうふうな現象が起きるかという、その現象が余り起こらないで、化学変化が起らないでただ投入してしまったというふうな、そういう感じで、むずかしいものだな、という感じはいま改めてしているんですけどね。これをプラス幾つかでイコール何かが出ないでイコールはやはり幾つかになっちゃってしまっているような、何かそんな感じがするんですけども、しかしこれは、私、最近出席しておりませんので、最近そういう成果が上がっていると申しわけないんですが……。農業がなくなってしまうと、むしろ村落が共通の場になるかも

しれないね。(笑) そんな感じで、むずかしいなという——これは別に不満というほどじゃありませんが、そういうことと、それにもかかわらず何か懐しい会であるということ、そんな感じですね。小池 僕もこの頃ほとんど出てませんからね、最近の情勢、どんなかよくわからないんで何とも言えないんですけども、とにかくこれは愉快な会ですよ、学会の中では無類の、例のない愉快な会です。先ほど中村先生、懐しいと言われたけれども、そういう意味でやはり懐しいんでしょ、出るような条件が整えばいつでも出たいという、そういう会ですよ。どういうことなのかという、例の泊まり込みというの、初めは僕は恐れをなしましてね、風呂へ入っても、各部屋へ入ってもみんな議論吹っかけられるんだと思ったら、そうじゃないんでね、そこが大変愉快だったと思うんですよ。

いままでここで一番感じてきたことは、社会学的な物の考え方というものをつくづく思い知らされたな、ということですね。もう一つは、社会学者というものは非常に緻密な議論を立てて、独自の構想を持っているのかもしれないけれども、経済学者の言うことはちょっとも聞いてくれない。(笑) こっちは一生懸命聞いているんですよ。そして、それをこっちなりにいろいろ思索しているんですけども、社会学者は一向に聞いてくれない。社会学という学問はずいぶんむずかしい学問なんだと、毎回つくづく思いましたね。(笑) これだね。

中村 それなんだよね。なかなか般は破れない。

福武 皆さんがおっしゃったような性格が、私よりお二人ともお年上だけれども、やはり懐しいと言わせているんだらうと思うんです。社会学とは、どうも経済が言っても学んでくれないという……(笑) そういうきらいはあるんだけど、やはりいろいろかみ合ってきたことがよかったですね。あ、勉強にもなったんですけども、組み合わせでむずかしいのは、歴史と現代を同じテーマでどうやって結ぶかというのには絶えず苦勞し、それで必ずしも成功しなかった。そういう感じはするんです。それにもかかわらず、経済史の方から報告してもらおうというようにところに、この研究会の特徴があったんだらうと思います。

私としては、これだけの会員がいて、全国で同じようなことがどういふふうになつてくるのかを持ち寄ろうじやないかということや、言ったことがあるんですが、そういうことは、結局成果を上げなかつたような気がするんです。初め、共同調査などというのを意図したわけですから、もう一度そういうことを、いまの若い方に考えていただけないかな、そういう気がするわけです。この村研が、いろいろの分野を糾合してというのは、戦前にはほとんど見られなかつた学際的な調査という機運の中に、そういう発想も出てきたと思うんですが、当時どれだけかみ合つたか知りませんが、学際的な調査ができたというのは、一面においてお金がなかつたわけですよ。あつたら飛びついたものだから、集まらないかというところがあつたわけですよ。ところが、いまは

豊富になったものだから、学際的に他の分野の人も一緒にという調査が非常に少ないですね。そういうこともあるんじゃないかと思うんですが、そういう状況ですから、実際に共同調査というのはむずかしいだろう。しかし、いまこういうことが問題だとすると、そういう問題がそれぞれの違った地方で、違った条件のもとでどうなってるのかというのを持ち寄って、議論するということをしていただけたらな、という気はいまだにしているわけです。

それから年報についてですけども、これは初めから時潮社の親父さんが乗り気になってやってくれたわけですが、かなり売れるということからの制約もついたという記憶はいまもあるんです。それがいよいよだめになった時に、塙書房に渡りをつけて、とにかく十年ほどやってくれたというのは小池さんの功績で、小池さんがそのお膳立てをしてくださったから、十年も続いたわけですね。お茶の水書房ということになると、いまの中心になってやられる諸君が渡りをつけたんですけども、なお、刊行物の方でどうもうまくいかなかったんですが、これも農村SSMが絡んでまして、農村SSMの調査費を、有賀さんが使い切らなかったというのか、少し残ったのを私に寄託して、それで始まったわけですが、それを順繰りに利益を使えるという、そういう目論みだったんですが、これはみごとに失敗してだめだったですね。そういう思い出があるんですよ。

内藤君が何割だと言いましたけれども、私もだんだん打率が下がっていくんで、初めの頃はわりあいよかったですけれども、

それがだめになったのは紛争ですね。私、伊良湖へ行っていないように思うんですけども、それまでは一、二の例外を除いて出て行ったんですが、あの紛争のことで篠山に参加しなかった頃からおかしくなって、それから四十五年くらいから調査をやらなくなって、やはり村研でちゃんと活動するためには、フィールドワークやってないと、どうも平仄が合わない。出ても懐しいというだけのことで、「やあ、こんにちは」ということになってしまふ。そういう感じですね。

高山 最後に福武先生おっしゃったように、村研というのはそういうフィールドといえますか、実証というものをひとつ暗黙の土俵にしていたという、それが基本だったと思うんですが、どうもね。

小池 年報について申しますと、学会でこういうような年報の出し方をしているところは非常に珍しい。大抵の学会というのは、年報の費用というものを会費の中に組み入れて、そして会員に買ってもらうことによってようやく出しているんですよ。それが、ここは一切それやらないでしょう。しかも三十冊近い年報が出ているということは、これは学会じゃ驚異だろうと思うんです。これは全く市販に頼っているわけでしょう。もちろんこれから後の問題も、書店の問題が出てくると思いますけれども、出版社の相当のご声援に対してもあるでしょうけれども、ただ、年報をこういう形で出しているところはない、誇っていいことだし、そしてまた復刻版が出ているでしょう。古いところはなくなつて、事業

がなお続いている。これは大したものだと思うんです。

これは、フィールドワークを中心にしてやっていると、非常に強みであり……。

中村 途中かもしれないが、いま福武さん、両方の先生のお話聞きながら思いついているんですが、初期には村落共同体というのでひとまとめが出たでしょう。ああいうぐあいに三十年たちましたから、現在の村落を各地の調査の結果なり体験の結果なりで報告し合ったらどうでしょうね。

高山 今年度は大会といたしまして、そういうことを計画はしているわけでございますけれども、

中村 そうですか、やはり区切りがつかますよね。一体どうなってるんだということでしょうね。部分的な問題としてはいろいろ聞いておられますけれども、しかし、それならそこでの村というものはどういうものがあるのか、もうないのか。ないならないではつきりした方がいい。それを一遍、村研でこそできることだから……。

高山 村研が発して十年目のところで、表題は「農民層分解と農民組織」、新潮社版の最後のものですが、ここで、村落研究十年の歩みということで、研究だけの研究的なものを出したけれども、村落それ自身についての評価といえますか、先生おっしゃるようなことは、正面切ってはまだやっていない。十年たつての二十年のところでもやっていない。そういう意味ではやっておりません。

中村 だから、この辺で一つやってみて、現況かくのごとしという

のを村研が示してくれるといいんじゃないでしょうかね。

四

安原 いま中村先生から、いまの問題はこれだ、ということを示せというお話が出たんですけれども、先生方が一番初めに研究されていた頃、発足の頃を伺いますと、村の状況も非常に大きく変わったわけですね。農があるかないか問題はあるかと思えますけれども、いまご覧になっていて、大体こういうところが一つのポイントになるんじゃないだろうかということ、ちょっと伺いたいと思うんですけれども、どうでしょうか。

中村 そう言われても、とっさにこれこれと挙げるわけにいきませんけれども、私など直接波しぶきかぶってる問題としては、共同体論なんというのが盛んに出てますね。実際は何を踏まえて言ってるかわからないんですよ。共同体への回帰とか、うまい言葉だけはたくさん出てくるんですけども、では、いま現在何をもとにして言ってるのかということが、村研をまくってみても出てこないですよ。村研の年報をまくってみたら出てくるということになると、これは便利でけんかしやすいんですけれども、それがないわけですよ。ですから、村研あたりはそういう地道な、あるいは基底になるような点を村研でこそ押さえておくということは、義務じゃないですか。

小池 これは大変なことだ。(笑)

中村 村とは何である、それをやっておかないと、村研の存在理由

がないと思うんですよ。

小池 これは村研が始まった時から問題にしてるんですね。

中村 そうだよ、そしてしかも三十年の間にガラッと変わってるわけだ。だから、初めの理屈じゃ、いまは合わないわけだ。だけど、共同体論というのはちょっと激しいですよ。多過ぎますよ。

高山 村回帰論というのですね。

中村 そうそう。そしてそれがまた、日本への回帰とかいうところへ吹っ飛んでいくわけだ。だけど、その一番もとになる村は何だといったら、団地だということになるでしょう。団地で神輿かっぐのは共同体ということになって、それでいいのかどうか。それでいいんじゃないという結論を出しておかきゃいけないと思うんですがね。だから、それを対話の時には私は時々発言したことがあるけれども、ひやかしてみたいにとられちゃって、まじめに取り上げてくれないうんだけれども、おれはいまあそこで、新しい千軒ぐらいの新興住宅地にまとまっているんだけれども、これが村かということの問題として出したことがあるんですけども、これも相手にしないんだから、だめだ。

安孫子 天童大会ですね。

中村 だから、そういうところは村研は、共通課題というか、共通の認識として持っていた方が本当じゃないかと、常々思っているんですがね。

内藤 私のは村というよりも家であって、家というより家族という形になってまして、どうもそういう意味で、村落研究会と直接の

つながりがあるということとはちょっと申し上げられないと思うんですよ。

ただ、私が村研に関心を持ったのは、戦前から若干漁村に興味を持っておりまして、漁村に興味を持ったというのも、実は日本の漁村じゃなくて中国の漁村で、これは牧野さんと向こうへ行つて、中国の場合は日本と違って差別——という言葉はいいか悪いか知りませんが、日本の場合はどうしても村じや農村が主体になって、漁村というよりは、てめえたちは食えねえということと、もう一つは生き物を殺すからというふうな、いふなれば差別感というものがあつたんですね。中国の場合はそういうのはなくて、堂々と生活しているんで、牧野先生と向こうへ行つた時、「帰つてから漁村をやるうじやないか。これは穴場だ」といっておつたんですよ。その後いろいろと経緯がございましたけれども、末子相続みたいな妙なものをやって、いわば家族慣行みたいなことになって、家族慣行というのを調査したのは、農村よりもむしろ漁村の方が多いいんですよ。というわけで、若干村研に関心を持ったのは、漁村をやりたいというふうな気持ちで、これは果たさなかつたんだけれども、最終的には漁村における家族というふうなものに収斂していったところまでは、いえるかと思うんですよ。ですから、私と村研というのは、いつもすれ違いみたいなものだったということですよ。

中村 すれ違いじゃなくて、いつも楽しそうだったね。(笑)しかし泊まりという形式、あれは実際にそこで議論するかどうかなん

てことは問題じゃなく、しませんけどね、私、あれは何となく雰囲気
がね。われわれにとつては社会学者という爬虫類だか何だかわか
らんようなものが、やはり同じ人間だと……(笑) そういう交流、
あれは僕はどうと思ってるんだ。

小池 村寄り合いですからね。

中村 ええ。やはりいろんなやつが一緒にいてみると、一緒にいら
れるものだという、そこが出発点じゃないですか。(笑)

内藤 有賀先生のお人柄というのかな、それが大きいと思いますね。

中村 彼も、しかし、経済に対しては偏向的に……嫌いやがってね、
弱ったんだ。(笑) しかし、一緒にやらなきゃならんということ
はしょっちゅう考えていたから……。

安原 村がどうなっていくかいろいろ問題があるでしょうが、農業
はだんだんなくなっていくつつあるんですけれども、村研の若い
会員はふえてるんですね。

中村 そういう連中に一つの指針を与えろというか、問題を一緒に
考えたらいいんじゃないかと思えますね。農業を知らない村落實
が出てきたかもしれませんな。

内山 しかし、他方で、農大の卒業生、わりに実際の農業について
村で生活している人が多いですよ。一週間ばかり前に大分でミ
カンをやってる二十七の人が来ましてね。卒業して千葉大の園芸
のマスターへ行って、帰ってからミカンをやっているのが来まし
て、電車なくなるまで一緒に飲んでたんですけども、ものすこ
く印象深かったんです。

つまり、ミカンもご承知のようにだめでしょう。ハウスミカン
を二反歩やってるんだそうですよ、ハウスミカンがはやりで、も
のすごくもうかるらしいですね、そう言っていました。ところが、
「先生、ハウスをかけながら、どうも妙にストレスがあつてしよ
うがないんです」だから私は「大学や大学院でやるみたいに試験
もないんだし、百姓やつててストレスあつたらしょうがないじゃ
ないか」「何だかわからないんだ」と言うんですね。「とにかく
作業をしていて、自然の中で、土の上でストレスがあつてしよ
うがないんですよ。こんなにかえってストレスが強いとは思いませ
んでした」と言っていましたよ。何だと言ったら、さすがにマスタ
ーまでいったから説明うまいんだ。自己の状況を説明するんです
が、とにかくいまお話の村落の話も、実行組合長だか何かのよう
なことをやっても、人が集まらないと言うんだな。幾らやっても
集まらない。二人ぐらいの若い人と一生懸命やっても、とにかく
人が集まらない。集めるのに四苦八苦だ。おばちゃんばかりだ。
普通の話ならいいけれども、ちょっとまともな基盤整備とかいう
ことになってくると、親父に出てもらわなければならぬんだけ
れども、全然出てこない、どうにもならないということ——こ
れ、村落が崩れたのか崩れてないのか、そこまでの議論はいろい
ろ問題があるからしませんかね。

それから、いまの市町村の行政村の段階でいうと、大分にも何
かテクノポリス構想というのがあるんだそうですね。つまり農工
両全といって、テクノポリス構想というものらしいんだな。それ

にひっかかってきている。だもんだから、農業委員会が、農業委員会というけれども、転用委員会だというんだな。とても農業委員会なんていえない。

それもまだ未婚なんです、結婚問題のことがご承知のとおり嫁不足で盛んにいわれるけれども、農業委員会の会長のビヘイピアを見てると、とにかく一生懸命、農業委員会だ、役場だ、普及員だといって、寄ってたかって嫁の世話みたいなことをするんですね。それはありがたいのだが、結局、見ると必ず仲人したがるって言っていましたね。仲人して自分の町会議員だか農業委員会の選挙だか知らんが、票目当てだ——。それから、自分の農業の数少ない先輩だと思っていた人が、結局は農業を食い物にしているというんだな。

それから農協は、いまご承知のとおり農協全体景気が悪いわけで状況悪いですけれども、そんなことがあるものだから、しかも農協をそでにしちゃうと、ご承知のように近代化資金その他の制度金融を受けにくくなるというわけですね。ということから、いやでも農業でも何でも、高いけれども農協から買わなきゃならない。そんなことがあって、農協は農民組合なき後の、農民の唯一の利益代表組織ですが、それに対してものすごく不信を持っている。農政に対してはもちろんですね。そういうことでイライラしてきて、ストレスみたいになっちゃうと言っていました。ストレスがきつくてかかないませんよ。東京へ出てきて、こうやって友達と先生方と飲んでるのが唯一の救いみたいですよと言っていましたね。

つまり、戦前の濃政はご承知のとおり天皇制の奉仕国家ですから、いざとなれば、農村恐慌の時でも、十分じゃないけれども国が制度として、理念としてカバーするように、農民を支えるようにできた。それが、憲法、民法改正とれちゃって、戦後、この村研発足ぐらまでは食糧増産ということがあったから、いわば制度的にというよりは、経済的に支えていた農村を、それもとれちゃって、いまご承知のとおり的情勢で、国全体も農民を支えるものはない。市町村もない。農協もない。村落もない。ギリギリいくと家族だということですね。ところが、その家族が専業で百姓をすることをきらう。農業なんてばかなことをやるな。その辺の市町村役場にも勤めて、月給取りながらミカンでもたんぼでもやるのが、経済的には一番いいんですから、そういうことで親まで反対する。回りはご承知のとおり、専業農家青年はものすごく少なくなってるわけですから、友達もない。ということ、とにかく完璧に何物かが自分のすぐ回りまでワーンと押し寄せてきている。戦前の農村であれば、国家なり村落なり家族なり、あるいは家連合なり、その他もろもろのあれがあって、農民個人を厚く幾重にもカバーしたと思うんですね。それが全部家族のところまでとれちゃった。それで、個人のところまで何かが押し寄せて、これを資本というのか何というのか、いろいろ言い方があるんですけど、そういうことで完璧に太平洋の真ん中を木ノ葉船で揺れてるみたいだということですね。

僕もこの四、五年、実は農民の自殺をずっとデータ集めてやっ

てるんですけれども、データは申しませんけれども、世界的にも農業青年の自殺がこんなに多いところは恐らくないと思うんですけれども、仮に、自殺ということは一つのインデックスに過ぎませんが、農大のあゝいう卒業生を見ると、資本あるいは都市というか、いろいろあるんでしょうけれども、そういうもののあれが、村の境を越え、家のへいまで破って、個人に突き刺さってきているという状況。むしろそういう意味でいうと、いまの問題は農民というふうに、パーソナルに接した感じで言うと、家とは何ぞ、村落とは何ぞという、いまやってるその百姓の人間とは何ぞと言っはいけません、存在とは何ぞと言っはいけません、何かそういう意味で、僕はどうも社会学、経済学というよりは、暴走して余り科学的でないというご批判は甘受しなければなりませんけれども、実存的次元といいますが、そういうものを問題にしないと、少なくとも彼らのあれにこたえられない。

農民だけじゃない、全体の社会状況、世界状況自身もご承知のとおり状況ですから、そういう次元で一体村落社会研究会というものが有り得るかどうかというふうに。また、そういう次元からもう一遍出て、村落とは何だ——仮にいえば土地所有というところが一つの概念になると思うんですけれども、実存と土地所有というか、所有といえますか——変な話で失礼ですけれども、マルクスの言うように人間のヘルハルテンと押さえる、ああいふところまでもう一遍返って、人間のヘルハルテンと、所有、それから村落——そういう意味じゃ、村研に哲学者というのは、考

えてみると入っていないな。ハイデッガーは農業といっはいけませんけれども、村落といっはもちょっといけません、つまりハイマート論というのがハイデッガーの生涯の課題みたいなもので、そういう意味じゃ、日本の哲学者の中にも、農村というか、土着性というか、そういうことについて関心をお持ちで、その関係から、日本についても関心をお持ちの哲学者というのは、僕幾らか知ってるんです。そういう意味じゃ、村研がいよいよ村の寄り合い風に混雑するかもしれないけれども、そういう哲学者までも含めて、もう一段拡大していくというふうになったら、いま中村先生その他がおっしゃっている、村落とは何ぞやということについて、現代原子力DNA社会的な意味で、もう一遍つかまえて、ころが出てきやしないかというのが、僕のドグマなんです。

細かなデータ載らないんですけれども、今度、八〇年センサスには出ましたが、たとえば一例だけ申し上げますと、昭和五十五年までの八年間に、全国に十四万幾つかある農業集落のうちで、大中小は別にして、とにかく工場ができたというところは、北海道を除く府県で約七割ですね。これが、その前の三十五年、四十五年のセンサスの時の十年間、それが約四割ですね。これはどういふふうに整理していいかわかりませんけれども、いらっしゃればわかりますけれども、どんな山村に行ったって、下請みたいな工場がある。そこで何がしかのおばさんが何かやってる。つまり現象的に見れば、至るところもう工場が、あるいは資本がといってもいいんでしょうが入っちゃっているし、われわれも商売です

から、毎年毎年土地の転用の面積をフォローしているわけですが、列島改造論の時には十万町歩を超えた土地の転用があったわけですね。六百万町歩としても、列島改造論のピークは、最高で十五万町歩近くいっているんです。六百万町歩ですから、四十年でなくなっちゃうみたいな勢いで、現在だって十万町歩ちょっとのところでしょう。これが、村研発足の当時ぐらいたと、まず一万町歩なんていう転用ないですからね。土地を取引き、といっているわけませんが、人をひっぱり、金を持ってくる。土地、労働力、資本というものを引きあげちゃって、そのかわりにでかい奴をパッとそういう形で工場、道路というような形で——つまりそれは国民所得統計の民間設備投資という、あるいは公共の設備投資の合計で出てくるわけですが、ものすごい額になったわけですね。こういう状況の中で、農業青年の皮膚のところまでパッと入っているという状況。そういう意味で、村落の自治とか、さっき中村先生がおっしゃったけれども、共同体復帰とか、そらぞらしいというんですね。そんなものはそらぞらしくて聞いちゃいられない。村研の自治も結構だし、共同体もいいんですけども、やや率直に言って、先ほど福武さんのお話もあつたけれども、僕ら年寄りから言わせると、テーマなり研究調査なりの実施が、研究費に引きずられてるといいますかね。つまり、そうじゃなきゃなかなか濃政調査会とか農林省から金が出ませんから、科研だつて、やや現在の研究費の支出のあれからいえば、トビックに引きずられますから、いわば農政なり全体のポリシーに研究が引きずられ

ちゃって、集落農業とか、地域農政とかいう方に、学者までが研究費を一つの媒介にして引きずられていく可能性がもしあるとすれば、これは最初に中村先生がおっしゃったように村研の創立の基本精神は、個人の研究と、個人の村とは何かという研究衝動にある、やはりその原点というものは、いま改めて帰れというのは、いけませんけれども、思い起こしてしかるべきだというふうに、つい一週間ばかり前の話だったものですから、印象深くて申し上げたかったです。

それで、僕ら、皆さんのように純粋な学者じゃあないから、目の前にそういう人がいると、どうしようかとすぐ思っちゃうんですね。それで、帰りの電車の中でいろいろ悩むんだが残念ながら答えは出てこない。いつか柳川の学会へ行く前に寄った僕の学生ですけれども、彼は百姓やりながら座禅やったり、『歎異抄』読んだり、そこまではないとどうにもならないですね。決して例外じゃないんですね。別に座禅やり、『歎異抄』読むということが、直接の現象ですけれども、そういう似たような動きをしている青年というのは、実に多いですね。というふうな状況になっていて、おれ何ができるかというのをいつも自問自答しながら、答えが出ない現状で、ひとつ村研なり、諸先生方のご教示を得たいというのが、いまの一番中心の関心なんです。

(四)

安原　そういう方向に話題が移っていきましたので、これからの村研に——きょうは村研の第一世代の方々に来ていただいているわけ

で、いまの若い人は第四世代ぐらいじゃありませんか。そういう若い人たちも含めまして、こういうことを希望するとか、先賢としてこういうことを注文したいということ、この機会にざっくばらんに伺えればと思いますけれども。

福武 そういうことをいう資格もなくなつたんですけれども、かねがね思っていることをちょっとだけ申しますと、前にもそんなことを、通信か何かに少し書いたことがあると思うんですけれども、匪徒裏端の調査なんていうのはそういうことなんですけれども、それが端的に出るんですけれども、自戒をこめていいますと、やはり外から村をちょっぴり見て、わかつたような顔してきたんじゃないかという気がするんです。中村さんなんて、腰落ち着けてひとつとこに長々取り組む。古島さんが前に吉治さんに言われたんだけど「そんなに浮気するな、あっちこっち浮気するな」と言われたって……(笑)それをいまだに印象深く思っているんですけれども……

中村 両方ですよ。両方なきゃいかん。

福武 そういうことは別として、いまおっしゃっている両方が望ましいんですが、それは置きまして、一般的にいつてそういう例外の人は別として、われわれどれだけ村に腰落ち着けてやってきたんだという気がするんですよ。それで、広く大きく調査をするということももちろん必要なんです、と同時に、村落研究会だから、やはり単位としての村を丹念に見るといふのをやらなきゃいけないんじゃないかという気がするんですね。それだけじゃ今度

はそれに引きずられて、きだみのるみたいになつちゃうんで、困るんですけれども、しかし、それは村研としては必要なんじゃないかという気がするんですね。そういうことを、少し若い会員の人にも考えていただきたいという気がするんです。たとえば、私の親友のドーアと私を比べて。日本人の私が村へ入ってなくて、ドーアは入っているんですね。そういう反省があるんですよ。ですから、広い網をかけて、構造的に物事をとらえるということも必要なだけども、やはり村の中に腰を着ち落けて、何か一つのフィールドを持って、絶えずそこへ行つて見るといふことが必要なんじゃないかという気はしますね。

中村 それは村研という場が一方にあるんですから、村研を構成しているメンバーは、それぞれに自分のフィールドを持っている。そうした上で村研という場にそれを持ち出してくるというのが理想でしょう。それがどっつかずになる危険がありますね。一人ずつが村研みたいな顔して、日本中のことを言ったり……(笑)

福武 だから、「おれの村では」と言えるようにならなくちゃいけないんですね。

中村 そうなんだ、「おれの村では」といふのを、僕は自分の村で言えるんだ。それで、おれの村では、おれのところは分家のわけは次男だ、有賀喜左衛門は大地主の長男だ。二人で発想が違うんだ。(笑)そのことは、おれと有賀氏との間だつたらすぐ比較できるんだよね。

福武 それは何も村を持ってなきゃいけないというのではなくて、

自分のフィールドとしてのおれの村で「おれがしょっちゅう行っているこの村ではこうなんだ」と……

中村 この安孫子君たちの南郷も長いね。

安孫子 もう二十八年行ってます。

安原 いま福武先生おっしゃったきださんの報告が、去年また出たんですね。ですから、意外に読者の要望みたいのがあるようなんですね。

福武 だけど、それは変な村への回帰ということから出てくるんだと思うんですよ。ただ、私はきだみの好きじゃないんで、彼も社会学者が何とかいったのが出ていますけれども、ああいうふうにもう村にいかれちゃったらだめですよ。しかし、彼のおられた別の条件があるんだけど、読ませるだけのものがあるというのは、彼は村に住んでいたのが非常にプラスで、では、村に住まなきゃ物と言えない、そんなばかなことを言うんじゃないんですけれども、やはりフィールドは常時訪ねてるといふものを持って、そこでどうなってるかというものが裏づけとしてあった方がいいんじゃないかという気がするんですね。

そういうことだと、やはりいまの村がどういふふうになっていくかという議論がかみ合ってくるんじゃないですか。おれのところはそうだ。どうして違うのか。というところで……。

内山 先ほどの補足で、その問題は、実は安原さんが学会でふと漏らされた松枝岐村の「かろうと」の話を、ご本人お忘れになって……

安原 覚えてます。

内山 村研もこういう問題を無視していいか、こういう問題提起がありました。安原さんのあのお話非常に衝撃受けまして、そのことを柳田さんの先祖の話とか、有賀先生の批判とか、もう一遍思い出されてきましてね。

中村 そのことに関して、私、後の村研のこれからに注文をしておきたいんですけども、いまもいろいろお話出ているように、そしてまた、社会学の諸君が前からそうであったように、どうしても問題が現在でしょう。

それで、一〇〇〇年前となると、もう人のことになってしまふ。しかし、村研は歴史部門をなくさないことが必要じゃないかということですよ。もう明治以後、何といったところで、いろいろ変化がありますから、それ以前なんていうのはどうして必要はないということになりそうだし、はじき出す危険はあると思いますけれども、私は、村研はやはり原理的に成立し得るためには、歴史部門がないといかんと思うんですよ。そしてまた、村研のメンバーである限りは、歴史的なパースペクティブを持っているような人間としての調査でなきゃ、やはり現状調査といったところで、目の前の問題だけになったら不十分じゃないか。だから、これは我田引水みたいですけども、将来とも歴史を重んじていくという、その点は堅持してほしいという、希望です、これは。歴史的なものから見てこない、解決がつかないということがどうしてもありますからね。人間の社会ですから。歴史を除いたら、これはやっぱりだめですな。村研、その点はやっぱり一つの特徴と

して、置いていかれたらという気がしますね。

内藤 中村発言を踏まえて言わせていただくならば、私は「日本の村落」なんていう形で一般化する前に、やっぱり村の地域的なバリエーションみたいなものをもうちょっとやる必要があるんじゃないか。その昔福武君が同族結合だとか、講組結合だとかの大きなスケマタイズはやったんだけど、そのうち同族結合的な村はわりに記録があるんですよ。どちらかと言うと中部地方から、東北地方にかけてのモノグラフといひのものがあるんだけど、福武君が言うところの講組結合といひの内容ははなはだ不十分である。

私はいっとき日本の村落が村であり、日本の家族が家であるなんて言ったのは、データからすると、やっぱり東日本に大きく偏っていると思うんです。だから結局信州とか、甲州の山の中とか、あるいは東北の部落だとかいうようなものが、あたかも日本全体の村落や、あるいは日本全体の村のモデルであるかのように取り上げられているわけです。もしこれからまた特別な、特殊なと言ひのかな、何か具体的な村を取り上げて調査をなさるとするならば、インテンシブな調査をなさるとするならば、調査のウェイトをもっと西南型村落の方にかけていく。いままでのデータのプランクを埋めるような形になってこないか、おかしいと思うんです。私、果たして日本の村落が村であり、日本の家族が家であるかどうかということは、非常に疑問を感じている。この疑問が杞憂であるならばいいけれども、何せ裏づけるデータがないんだから、

もっと関西から西の方をやっていた方がいいという感じがするんです。余田君がやったのが、まあまああれは西の方の村の例として……

中村 いま僕は、大学院の学生が九州のやつで、あっちの佐賀とか、あの辺の農村地帯の話をしているやつで、やっているんですけども、これは東北の民と、文明発祥地の九州の民と、どうしてこんなに同じことをやっているかと思うぐらい同じなの。ご心配ご無用じゃないかな。(笑)

福武 内藤君の言うのも一理ありまして、別に外国人がいつているからというんじゃない。クライナー、あれは奥さんが熊本でしょう。『朝日ジャーナル』にちよっといたりしている。どうも日本の村の考え方というのは、内藤君が言ったような、同じようなことをいつているね。戦前の柳田さん、有賀さん、戦後の福武もそうだったって……(笑)

安原 たえば村研のメンバーで余り大会には参加されませんが、江守(五夫)さんですね。江守さんのような方のお仕事を議論するような機会が、意外に村研でないということがあるんですね。そういう意味ではやはり民族学の方なり、それから法社会学の方なり、初めはそれなりにコミットしてください方々が、最近余りお見えになっておられない。そうすると僕らは少しさびしいわけなんですけれども、これからもむずかしいかなとは思っているんですけれども、もしそういう機会がありましたら、むしろそういう方々にも……

中村 その問題にかかわるかどうかしらんけれども、僕の感想で申しますと、僕は京都にいる三年間下賀茂の百姓屋にいたんですよ。農家に。農家の離れの馬小屋の二階に。それでその農家のことをよく知っています。これは東北の農家の中では最も低いと言わ、貧しい家のような生活組織。しかしじゃあ貧乏かと言つと、お金はちゃんとあるんだよな。だけども、いろいろから、何から、そこらの状態というものは、ちょっと驚くほど……僕は東北へ行って、えらい開けていると思つたぐらいのものだ。あるいは信州の方が開けていると思つたぐらいのものだ。(笑) そういうことなんで、行きずりに見ただけではちょっとむずかしいですね。

内藤 大きく言うると日本の村というのは、畑作の村をどのぐらい皆さん見ているかということ。非常にわかりやすい指標で言いますと、村自身が非常に大きいということですよ。近隣集団なんて、あつて、なきがごとしところのものであつてね。それから生産力云々というような指標は別としましてね。鹿児島村を知らんなれば、あそこは門割制という特殊なものがくっついていてるんだけれども、ちょっと日本の村というイメージ、東北の村から描き出すところの日本の村というイメージからすると、大きく外れてる。

中村 いま議論をするつもりはないけれども、門割というのもおもしろいですよ。そんなにびびくりするものじゃないな。

安原 これからおもしろそうなお話を伺える雰囲気になってきたよ。うですけれども……。小池先生、経済学の方からということじゃ

必ずしもありませんけれども、なかなかかみ合にくいところもずいぶんさつきもあつたんですけれども、そういうところで、これからの若い世代にこれはというふうな注文があれば……。

小池 僕はもう大分村の研究から離れているんで、それから村研ともごぶさたしているんで、余りどうも申し上げることはないんですけれども、ただ村研というのは「宿題委員会」というのがあつて、一年間かかって次の大会までに村に入って調査をして、その結果を持ち寄つて報告しようという、そういう制度だと思つて、それがだんだん課題という形に言いかえられたことによつて、いつの間にか宿題という意味が薄れてきてしまつたんじゃないか。これをもう少し忠実に守つていただければ、大会で先ほどから言われているような論点のかみ合いというものも出てきて「この村では」というようなことが、わりあい言いやすくなるんじゃないだろうかという気がするんですがね。

事務局 大分今後の方向もまとめて出てきたようです。研究方向なり、これから村落にある問題をゆっくり見据えていこうということで、若い人達に対する要望もあつたと思います。私たち事務局としては、冒頭に申しましたように『通信』の特集号として、会員に早急に配布したいと思つています。本日は、長時間本場に有難う御座いました。